

て馴れきつてしまつてはならない、甘へ過ぎてはならない。

みちのくや筑紫のはてにかへるこも

折りくめてよ久遠の月影

これは高田教頭先生が私共の卒業の折、詠んで下された歌です。

自分は一人今叡山に在つてそして鷺のみ山に合掌しつゝ、四明山上高く止觀の月を仰いでゐます。みちのくや筑紫のはてに歸られた級友も、みんな鷺のみ山に合掌しつゝ恩寵の生活を送つてゐる事です。

一九二八、九、九一

私が延山を去る瞬間に得た體驗を認めました、意を盡す事が出来ないのが残念です。

本妙律師を慕ひて

三 木 淨 達

會て私は醒悟園叢書を讀んだ。それは本妙律師の遺編として、書簡類を集めたものであつた。初め何の氣なしに讀んで行つたが、だんく尊い本妙律師の靈格に觸れ、果ては涙と共に武者振り讀んだ。

こんなに尊い上人がこんなに近くに在つたのかと、熱し易い私の若血は涌かすにはゐなかつた。

律師の行跡が僅か五六里の雨畑にある事を知つて、私は近い中にきつとこの村へ行かうと決心した。流れも早い早川の足場危い川岸に沿ふて上れば、憧れの雨畑の村は眼前に迫つてきた。それは至つて寂しい山村だつた。電氣の光も見ぬ、文化の恵みには遙かに縁遠い地だ。

四十軒のこの村より奥にはもう一軒の人家もない。本妙律師の行跡まではまだ一里以上もあるといふ。村の人は私の事を案じて、種々と危険な恐ろしい話を聞かせて、私の心を變へさせようと勉めるらしかつた。けれども私の前に現はれる静寂な岩窟や、清い瀧の音はそんな顧慮をば物の数ともせなかつた。あまり人が入らないので、道らしい道とはなかつた。私は静かに題目を口吟みながら案内者の後に従つた。或る時は危く懸かる丸木橋を渡り、又或る時は朽倒れた大木に行手を遮へざられながら、次第に山深く分け入つた。

山又山の其の間に溪水が落合ふ邊、掌位な平地がある。人跡絶わたり此の地の雜草は優に私等の身丈を没するに十分だつた。偶々訪れ来るものとしては、木枝を傳ふ猿のみだと聞く。

五六丈もある岩鼻から雨垂の様な瀧が落ちてゐる。律師の行瀧はこんな細い筈はないのだがと訝しく思つてゐた時、この瀧は降り續く五月雨時も、萬物渴して雨を祈るの節も、水量に増減なしとの不思議な傳説を有つてゐるのだと、案内者の話を聞いて、やつと心の謎が解けた。

此の瀧から僅か離れて、大きな石でも破れて抜けたかの様な穴がある。私の感情は不思議に動いてゐた。

「本妙律師荒行の地」斯う書いた一尺餘の木札が此の穴の奥の角に嚴かに祀られてあつた。誰がお祀りしたのでらう？ 今は苔さへ生ひて山蟹が……、おく勿体ない！

あゝ、隠れたる聖者本妙律師よ、律師が靈は百十餘年後の今日尙力強く輝いて、常に私等の迷ひの心を照し給ふ。然しかゝる人格者本妙律師は唯知る人のみ知る聖者であつた。それは此の雨畑山中の草深い岩窟の様に、容易に人の眼を留めない律僧としての御生涯であつた爲だらう。しかし赫々たる功業は元より律師の望み給ふ所ではなかつた。律師は常に「表具の裏打ちを以て任ずるのみ」だど口にせられてゐたのである。何といふ尊い言葉だらう。この言葉があつてこそ、其の門下に優陀那日輝大和尚や新居日薩上人が出て、今日の宗門の大成をなしたのである、宜なるかなである。

願くば律師愚鈍なる私の上に廣大なる加被を垂れ給ひて宗門有爲の人材となし給へど、心に高く渴仰の叫びを放ちつゝ、涙と共に自我偈を誦じて法味にかへた。

谷に下れば踊り狂ふ水は、大石に叩かれて飛沫雪を吹き、岸を噛んでは奔聲雷を欺き、留まりては魔の淵となる。ひんやりとした空氣がゾク／＼と身体を襲つて来る。水はあくまでも清い、私は此處にかうして居る事をどんなにか嬉しく思つた事だらう。此の谷の流れに會て醒悟園叢書の巻頭に見た

本妙律師荒行の瀧があつた。私は思はず襟を正さざるを得なかつた。

今や名利名聞に腐心して汲々たる宗教家の少からざるを思ふとき、自ら宗門の裏に隠れて萬歳の基を固めやうとされた本妙律師を偲ぶの念更に切なるものがある。

七面山へ

吉 田 碧 洞

シャツ一枚に靴といふ輕装に身ごしらへして、七面山へ初の登山と志す。御廟所を過ぎて晝猶暗き杉林の中を脚下に身延川の清流の音を聞きつゝ妙石坊を過ぐれば、いよく爪先上りになる、樹木益々茂つて已に深山の氣立つ。曲折多き道を辿る事時餘にして追分に着いた。脚下は何百丈とも知れない谷、森々たる樹海の盡くる所富士川の奔流あり、宛然身は天界に處するかと思はしむ。少憩汗を拭き、房主志しの甘酒を謝し足を道に向ければ稍廣くして下り道、佐渡の畑野から聖祖着岸の靈地、松ヶ崎へ行く小倉道中宛らであつた。汗一つ流さず却つて涼しさを感じ乍ら赤澤へ着いた。時計は一時すぎても二時には間があるので夏密柑二つ三つ買ひ求めて、皮をむき人通り少ないのを幸ひに頬張り